

ソクラテス（その一）

W・イエーガー
村島義彦 訳

「吟味のない生活など、およそ人間が生きるに値しない」

ソクラテスは、歴史上にみる「シンボル」と化した不滅の人物のひとりである。かれ自身は、前四六九年頃に生まれ、前三九九年に死を宣告され、まもなく刑に処されたのだが、この歴史上に実在したアテナイ市民について、当の本人が、われわれの永遠の「代表者」に昇りつめた時、かれを彷彿させる具体的特徴のほとんどは、われわれの記憶からきれいさっぱり洗い流されていた。もつとも、かれ自身がどうした生活を送り、どうした教えを語り伝えたか——総じてそうした教えを持っていたとすれば——などは、「われわれの永遠の代表者」というイメージにいささかも与からず、与かって力があつたのは実に、かれ自身が、それに依拠してわが生を導いてきたそもその信念に基づいて、自らの死を迎え入れたという事実であつた。のちのキリスト教の時代に、ソクラテスは、キリスト教に先立つ殉教者の典型として高く評価され、宗教改革時代の偉大なヒューマニストであつたロツテルダムのエラスムスなどは、こうしたソクラテスを、大胆にも、自らが聖者とみなす人たちの一団に迎え入れ、あえてこう呼びかけるのも辞さなかつた。「聖なるソクラテスよ、われわれのために祈りたまえ（サンクテ・ソクラテス・オラ・プロ・ノビス）」と。こうした祈りは、なおも中世の教会に特有の衣装をままとつていたけれども、そこにはすでに、ルネサンスの手で封印を解かれた新しい時代

の精神がはつきりと予告されていた。中世を通して、ソクラテスという人物は、アリストテレスやケケロが口にする「誉めそやしの名前」以上の存在ではなかつたけれども、今やしかし、スコラ哲学の王者としてのアリストテレスの重みは下がって、逆に、ソクラテスの重みが急激に増すことになつた。ソクラテスは、あまねく近代啓蒙を導き、あまねく近代哲学を導く第一人者となつたのである。すなわちかれは、いかなる教義や伝統にもおよそ縛られることのない、完全に自らの足で大地を踏みしめた、しかも、内なる良心の声が命ずるところにのみ従うといった、道徳的自由の隠れもない使徒であつた。あるいは、内なる力を介して実生活の中で幸福を戦い取るべしと訴えた上で、この幸福はしかも、いわゆる神の恩寵に基づくのではなく、自らの本性を完全化する不断の汗と努力にこそ基づくのだと述べ伝える、新しい「この世の宗教」の告知者であつた。とはいえ、こうした図式で、中世末以来の数世紀にわたつて、ソクラテスが担つていた意味そのものを十分に言い尽くせるわけではない。とにもかくにも、ソクラテス本人に拠りどころを求めないなら、新しい倫理思想にせよ新しい宗教思想にせよ、およそ世に広まらなかつたであろうし、精神的な運動も、およそ展開されなかつたであろうからである。ここにみる「ソクラテスの復活」は、それゆえ、単なる学者的な興味・関心から生じたのではなく、あくまでも、ソクラテスの精神的なあり方への直接の熱中にその端を発していた。そして、ここにいう「精

神的なあり方^レは、新たに発見されたギリシア語の資料から、わけても、クセノフォンの作品から大きく学び知られたのであった。

ところで、こう語ったからといって、どうか誤解しないでもらいたい。ソクラテスの手に導かれつつ、新たな^レこの世の宗教としてのヒューマニズムを築き上げる、という企てはおしなべて、キリスト教に逆らう意図を含んでいたのであり、これ自体は、アリストテレスが中世に、あまねくキリスト教哲学の基盤に祭り上げられたのとあくまでも方向を逆にする、などと思いい巡らすのは、とんでもない間違いだからである。むしろ逆に、イエスの宗教がもつ不朽の中身とギリシア的な人間理想の主だった特徴を見事に融合させた、新時代にふさわしい^レ文化の創造に手を貸すという役割が、今や改めて、ソクラテスという異教の哲学者に割り当てられたのであった。これを要求したのは、他でもない、人間理性に向けたいや増す信頼と、新たに発見された自然法則への畏敬を二柱に仰いだ、これまでとは革新的に異なる人生観のあくなき支配意欲であった。理性と自然は、古代啓蒙の主導原理であつて、キリスト教信仰は、そうした両者に混ざり入ろうと努めたけれども、結局のところ、初期の普及の世紀以来の事態を変えることは叶わなかつた。新たなキリスト教期はそれぞれに、自らに固有の仕方、古代における人間と神の理念に対決した。そうした休息を知らない過程の中で、ソクラテスというギリシアの哲学者に、ひとつの課題が割り当てられたのであった。すなわち、概念的な明晰さにまで高められた自らの思索を介して、まさしく精神的な仕方、「理性」と「自然」と、さらには双方の権利に大きく味方するという、つまりは「理性的な神学」ないし「自然的な神学」の役割を果たすという、そもそもその課題である。そして宗教改革が、「純粋な」スタイルの福音に向けた復帰に初めて本気で取り組もうとした時、これへの反動と調整を図って、啓蒙の世紀におけるソクラテス崇拜が生じた。

ソクラテス（その一）

こうしたソクラテス崇拜は、何もキリスト教の排除を望んだのではなく、そもそもキリスト教に、あの時代には^レ不可欠なもの^レと思われた諸々の力を供給した。さらには、驚くほど硬直化した神学的悟性宗教に堕した当時のキリスト教に強く異を唱える、純粹にキリスト的な心情の発現である敬神主義にしても、やはりソクラテスに拠りどころを求めて、この人物の内に、精神的な血縁関係を見出したと信じて疑わなかつた。このように、ソクラテスをイエス当人に比べる試みは、その後もくり返しなされてきた。われわれは今日、ギリシア古典期の哲学を介して成立した、他でもないキリスト教と「自然的な人間」の和解というチャンスが、そもそも何を意味したかを多分に推し量ることができる。その場合に明らかなのは、何はともあれ古代のイメージが当の和解に強く寄与していて、しかも、そのイメージの中心にはソクラテスという人物が屹立していることなのである。

ここにいうギリシアの哲人は、新時代の始まり以来、^レキリスト教における本来の魂（アニマ・ナトゥラリテール・クリスティアーナ）の見事な手本として、絶大な影響力を限りなく世に行使してきたが、現代ではしかし、このことが大きな仇となつていく。フリードリッヒ・ニーチェが、キリスト教との縁を絶つて、いわゆる^レ超人の到来を大々的に告知した時、それは、これまでのツケを払わなくてはならなかつたからである。すなわちソクラテスは、数世紀にわたつて、^レ霊と肉（魂と肉体）に引き裂かれた二元論的なキリスト教の生活理想と分かちがたい同盟関係を結んできたように思われていたから、そもそもその二元論が崩壊すると、これに伴つてかれ自身も、同じく崩壊の憂き目を見ないわけにはいかないように思われた。そればかりではない。ソクラテスに向けられたニーチェの激しい敵意の中で、新たな衣をまとつて、再び息を吹き返したものがあつた。他でもない、^レ人間性を概念に還元する^レというスコラ哲学

の発想に対して、エラスムスのヒューマニズムが覚えたあの古い憎悪である。ニーチェにとって、アカデミックな哲学を主知主義の硬直化に導いた当の人物であり、そのシンボルともいえる存在は、世にいうアリストテレスでなく、あくまでもソクラテスであった。ここにいう「主知主義の硬直化」はまことにしぶとく、五百年以上にわたってヨーロッパの精神を鎖につなぎ、ショーペンハウエルの弟子（＝ニーチェ）の鋭い鼻は、いわゆるドイツ観念論の神学研究体系の内に、そうした硬直化の最後の末裔の匂いを敏感に嗅ぎ取ったのであった。ニーチェにおけるソクラテス評価は、基本的に、当時の脚光を一手に独占し、まさしく「画期的」と評されてよいエデュアルド・ツェラーの『ギリシア哲学史』に描かれたソクラテス像をそもそもの土台とし、ツェラーの作品はしかも、西洋における古典古代とキリスト教のさまざまな葛藤とその調整を介した精神自体の発展プロセスをできるだけ弁証法的に再構成する、というヘーゲルの壮大な仕事を当の土台としていた。新しいヒューマニズムは、強大かつ無比な伝統の力に逆らって、「ソクラテス以前」のギリシア精神に改めて焦点を合わせた。ここにもみる方向転換は、何はともあれ「ソクラテス以前」の発見にその端を発していた。ならば、ここにいう「ソクラテス以前」とは何を意味するのか。それは、実に「哲学以前」を意味していた。というのも、古典古代に先立つアルカイックなギリシア世界に遙かな思いを馳せるニーチェ等の思想家は、今日、当時の偉大な詩や音楽を一つに融かし合わせ、全体として、ギリシア人の「悲劇時代」という固有の時代像を形造っていたからである。ここにいう「悲劇時代」とそこでの作品群では、ニーチェ当人がひたすら双方の合一を求めた、そもそもの「アポロンのな力」と「ディオニュソスのな力」が、なおいまだ驚くべき釣り合いを保っていた。魂と肉体（あるいは霊と肉）は、なおも一体化していた。大々的に称賛されてしかるべき、とはいえ、ニー

チェに追随する垂流の輩の手でごく表面的な意味に解されがちな「ギリシア的調和」は、この原初の時代、恐るべき底無し深淵を隠し持ちながらも、なおいまだ滑らかな鏡の状態を保っていた。しかるにソクラテスは、アポロンので合理的な要素をひたすら強調し、これを圧倒的な勝利に導いた結果、とどのつまりは、ディオニュソスので非合理的な要素との絶妙な緊張関係を台なしにし、そもそもの調和自体まで見事にぶち壊したのだった。文字通りに「原ギリシア的」と呼ばれてよい悲劇的な世界理解は、このように、ソクラテスの手できっぱりと道徳化され、学校教材化され、主知主義化されてしまった。およそこう考えると、のちのギリシア精神が気化して出来上った精神的所産ともいべき観念論、道徳論、精神論の類いはすべて、ソクラテスの罪の口座に記帳されなくてはならないだろう。かつてキリスト教の時代、ソクラテスは、「自然」として我慢のできるギリギリの限度を代表していたけれども、今やしかし、ニーチェの新しい見解に従うなら、本当の意味での「自然」は、ソクラテス当人の手でギリシア生活から追い払われ、代わって座を占めたのは、これとは逆の「自然ならざるもの」であった。こうしてソクラテスは、十九世紀の観念論哲学が自らの歴史像の中で当人に割り当てきた、きつちりと確保されてはいるが、かといって最上位とも言いがたい指定場所から出て、再度、現代の論争の渦中に巻き込まれた。かれは、十七世紀と十八世紀にもしばしばそうあったように、改めて今一度、シンボルの地位に就いたのである。とはいえそれは、否定的な意味でのシンボルであって、いうならば衰退の尺度ないし徴標に他ならなかった。ここにみられる途方もない敵意は、ソクラテス当人には、むしろ榮譽といべきであったかもしれない。ともあれ、そうした敵意を介して、ソクラテスの本当の意義を求めての真剣な格闘が、驚くほど徹底して展開されることになった。われわれはしかし、まことに情熱的で反逆の色

合いの濃いこのソクラテス評価が、果たしてどれほどの堅牢さを具えているかについて、今は、あえて問わないでおこう。すると、ニーチェが繰り返し広げた闘いは、今の時点で眺めると、まさしく「最初の前触れ」と映るのではないだろうか。すなわち、ソクラテスという古い競技者の力がいまだ翳りをみせず、ゆえに、ニーチェという近代の超人は、この人物のおかげで、自らの内なる確信がわけても激しく脅かされているなど実感した、そもその前触れという意味である。ニーチェのソクラテス評価には、新たなソクラテス像について、これ以外にほとんど触れられていない。というのも、歴史意識のひととき強い時代に生きるわれわれは、「新たなソクラテス像」という言葉で、偉大な人物を、置かれた具体的環境や時代から無邪気に切り離すニーチェの極端な姿勢とはあくまでも真反対のものを、普通一般には思い浮かべらるうからである。ソクラテス当人は、自らの時代が自らに用意した課題自体に徹底して取り組んだがゆえに、あえて、自らについて書き記した言葉の類いを後世に何ひとつ残さなかった。こうしたソクラテであればこそ、世の誰にも増して、自らが身を置く「歴史的状況」から自らを理解してほしい、とわけても具体的に要求するのである。ソクラテスが生きた時代のこうした状況に、ニーチェは、現代生活における甚だしい合理化への傾斜過剰を糾弾した容赦のない闘いの中で、いささかの関心も示さなかったし、さらには、忍耐強い理解を好意的に振り向けることもなかった。この状況はしかし、われわれの手で「ギリシア人の精神的危機」という名を与えられ、今では、その中身も詳しく叙述されている。歴史そのものがソクラテスに割り当てたそもその位置は、こうした背景の前面であり、こうした時代の移り目であった。もつとも、歴史的な振る舞いといえども、その基本において、諸々の誤解から完全に自由というわけではない。この点は、ソクラテスが生きた時代の具体的状況を同じ土台に仰ぎながら

も、昨今において導き出されたソクラテス像がいかに多彩であるかに目を向けるだけでも、ほぼ十分に証明されるにちがいない。古代における精神史のいかなる領域を眺め渡しても、ソクラテス像に認められる以上の不安定と揺らぎは、およそ目にされないものである。われわれはだから、ソクラテス像を構築するにあたっては、どうしても基本的な所与の数々から出発しないわけにはいかない。

ソクラテス問題

ところで、われわれが依拠してしかるべき基本的な所与のうち、わけでも基本的な所与というのが、実は、ソクラテス当人でなく、同時代人たちの手で出版された当人に關する書物の数々であった。ソクラテス自身は、何ひとつ書き残さず、われわれの手元にある関係資料はすべて、当人の直接の弟子たちの手で纏められたものであったからである。こうした書物のいくばくかが、果たして、ソクラテスの存命中にすでに世に出ていたか否かについては、いまだ十分に解答されていないけれども、これにはしかし、より大きな内的確率で「ノン」と宣言されてよいだろう。^⑤ここにいうソクラテス文学と、さらには、イエスの生涯と教えを記した最も古いキリスト教の文献の、そもその源をめぐる条件上の類似性は、これまでもしばしば強調されてきたし、事実、かなり人目を引くものでもあった。イエスの場合と同じく、ソクラテスの直接の影響もまた、明らかに、当人の死後にはじめて顕著となって、その弟子たちの手で「完結した像」にまで創り上げられていった。思いもかけない「ソクラテスの刑死」という強い動揺を誘う事件は、弟子たちの生活に、深く強烈な裂け目を刻まずには措かなかつた。こうした破局の印象下に、はじめて弟子たちは、自分たちの師の姿を何とか作品に書き残そうと、

強く決意したのはほぼ間違いない^⑥。それゆえ、ソクラテスの姿を歴史的に結晶化しようとする、これまでは曖昧に留められていたプロセスが、同時代の人たちの手で開始されたのである。プラトンはすでに、わたしの信奉者や友人たちは、わたしの死後もやはり、アテナイの皆さんを安穩に保っておくことはなく、むしろ、耳に痛い警告を発する厄介な問い手としてのわたしの営みを忠実に引き継ぐにちがいない^⑦と、居並ぶ裁判官たちを前にした弁明演説の中で、当のソクラテスの口から予言させていた。ここに紹介した言葉の内には、ソクラテス自身の手で展開され、以後に急速に花を咲かせたソクラテス文学によっても、同じく展開に肩入れのなされた活動のプログラムがはつきりと含まれているにちがいない^⑧。ソクラテス文学は、当の人物の生き方と口にした言葉をアテナイ市民の記憶からひたすら拭い消すために、この世の裁判を介して死刑に処されたソクラテスを、その忘れがたい独自性に着目して鮮明に永遠化し、当人の警告の声が、今の人間の耳にも将来の人間の耳にも、いつまでも消え去らないようにしよう、という弟子たちの強い意図から生まれた。こうしたわけで、それまではソクラテスを信奉する小サークルの連中間にだけ共有されていた道徳的な動揺が、あまねく周知の出来事となったのである。ソクラテスが述べ伝える中身は、新しい世紀の文学的な焦点となり、さらには、その思想的な焦点となった。かれの祖国のアテナイは、世俗的な力が衰退したのちも、他方の精神界で世界規模の支配力を誇ったけれども、その主要な源は、実に、ソクラテスの教えから生い育った活動を措いてなかった。

今日のわれわれの手に残されているプラトンの対話篇、クセノフォンの対話篇、同じくクセノフォンの『ソクラテスの思い出』、そして最後に、アンティステネスとスフェトスのアイスキネスの対話篇の断片類は、ソクラテスをめぐって、それぞれに異なった情報を提供しているけ

れども、それでもしかし、完全に明らかなことが一つばかりある。それは、これらの弟子たちがおしなべて、ソクラテスという偉大な師の比類ない人格に触れて自らの生き方を大きく転換せざるを得なかった実体験から、当の「人格」自体を何とか描き出そうとそれぞれに努めた点であった。その場合に、「問答」とか「思い出」というスタイルは、ソクラテスを師と仰ぐ小サークルの連中が、ここでの要求に叶うものとして新たに考案した文学様式であった^⑨。二つのスタイルは実に、およそソクラテスにあつては、師としての精神的遺産をその人間自体から切り離すのは不可能、という弟子たちの見識から生まれた。こうしたわけで、ソクラテス自身から得た感銘そのものを、当の本人と直接の交わりを持たなかった人たちにまでの確に伝えるのは大いに困難と思われたのだが、それでもしかしこの試みは、いかなる犠牲を払っても敢えて為されなくてはならなかった。そうした試みが、ギリシア人の感覚にどれほど革命的に映ったか——この点は、どんなに強調してもし過ぎることはないだろう。その当時、世の人間とか人間的特徴を眺めるギリシア人のまなざしは、かれらの生活自体と同じく、類型的・慣例的なものにほぼ完全に支配されていた。古典時代の主流ともいえるこうした人間理解の中で、ソクラテスへの賛美は、そもそもどのように眺められていたのだろうか。これを類推するにあたり、前四世紀の前半に誕生した文学様式としての「賛辞」を、われわれは、格好の対比物として提示できるかもしれない。ここに紹介した賛辞というジャンルの成立には、言うまでもなく、傑出した第一級の人物をあがめる風潮のさらなる高まりが大きく作用していたけれども、そうしたジャンルはしかし、傑出した第一級の人物の価値あるゆえんを、ひたすら当の本人が、典型的な理想の市民ないし理想の統治者に欠くことのできない徳のすべてを具えている、という一点に絞っていた。こうした仕方では、当然ながら、ソクラテスの本質

になど至りつきがたい。それゆえ、ソクラテスの人間ならではの人格に焦点を当てた研究が生まれ、ここから初めて、古代における、個人の心理に着目した記述様式^①が誕生したのだった。そのような記述様式の最高の担い手は、言うまでもなくプラトンであった。文学作品に登場するソクラテスの姿は、偉大でしかも独創的な人物を相手にギリシアの古典時代が生み出した、あくまでも他に類例をみない実物そのままの描き出しである。こうした描き出しに向けてあまたの弟子たちを駆り立てたのは、実に、冷静な心理学的好奇心とか、解剖への道徳的喜びなどでなく、あくまでも、われわれなら「人格」と呼ぶであろうもの——当時はいまだ、この価値に見合う言葉も、さらには、それを表現する概念も共に目にされなかった——が、そもその弟子たちに如実に体験されたからであった。すなわち、ソクラテスという強力な手本を介して導き出されたアレテー（徳）概念の転換そのものに促されて、弟子たちは、当のソクラテスの描き出しに向かったのだ。ここにいう「転換」がいかに強く弟子たちの心に意識されたかについては、ソクラテスという人間に捧げられた尽きない関心からも、おそらくは伺い知られるにちがいない。けれども、ソクラテスに具わった人間の本質は、わけても、他者に及ぼす影響の中に如実に現われた。かれの道具は、あくまでも「口にされる言葉」であった。ソクラテス自身はしかし、自らの言葉を何ひとつ書き残さなかった。というのも、かれに文句なく重要視されたのは、他でもない、語られた中身がその瞬間にどうした人間に向けられていたか、の関係様式であったからである。ソクラテスを描き出そうとする試みは、おしなべて克服できない障害に出会うのだが、これは実に、こうした点に起因していたといえるだろう。さらに加えて、ここでの障害に与かったと思われるものとして、わけても、問いと答えを繰り返す形で進められた、従来の文学ジャンルのいずれにもそぐわない、ソクラテスに固有

の対話様式が挙げられてよいかもしれない。ここにいう障害は、ソクラテスの問答を書き記した文献がいくつか残されていて、その問答の中身も、プラトンの『テアイテトス』に例証されるように、少なくとも部分的にややや自由な再構成できる、と仮定されたにしても、やはり突破できないだろう。プラトンの対話篇は、その他のソクラテスの弟子たちの手で模倣され、さまざまの対話作品を世に生み出したけれども、そうした手本の様式が生み出されたのは、実に、ここに紹介した障害に刺激されてのことであった^②。そのプラトンの作品を介して、ソクラテスの人となりは、わけてもわれわれの前に具体化され、いっそう親しみ深いものとなっていくのだが、他方しかし、ソクラテスの弟子たちの間で、偉大な師の繰り広げた問答の中身を作品化するにあたり、まことに極端な理解上の格差が堂々とさらけ出されて、この格差がまもなく公然とした論争を引き起こし、埋めがたい溝を末長く刻み込むことになった。ソクラテスは、こうした状況を評して、初期の作品でこう語っている。これらの景観は、ソクラテスの内輪のグループに属さない諸々の連中の意地悪い目には、大いに好ましいものと映って、正しい判断力を具えていない輩は、これのおかげで、弟子たちの優劣を問う「コンテスト」の仕事がまことにやり易くなるな、と考えるに至ったのだ、と。ソクラテスの死後わずかにして、弟子たちのサークルは脆くも崩れ去った。弟子たちはそれぞれ、持てる情熱を傾けて、自分自身のソクラテス理解に固執した。そして事実、さまざまなソクラテス学派が誕生した。われわれはこうして、まさに「パラドックス」と形容する以外にない状況下に、そもその自分が置かれているのを強く実感するのである。というのもわれわれの場合、ソクラテスという古代の思想家について、その他のいかなる思想家も及ばないほどに豊かな伝承を擁していたにもかかわらず、あろうことか今日まで、ソクラテス当人のそもその意味について、

いまだ合意にたどり着けないでいたからである。なるほど、特定の思想家を歴史的に理解し、さらには心理学的に解釈する能力そのものは、今日のわれわれの方がいっそう優れていて、ゆえに、そうした試みにあえて手が染められても、いっそう確かな基盤が当然に与えられているはずだ、と一応は考えられるかもしれない。けれども、これ自体は大きな間違いとみる他はない。具体的な文献を介して知られるソクラテスの弟子たちは、自らに固有の本質を——これ自体がもはやソクラテスの影響から切り離せなかったにしても——、ソクラテス当人ときわめて完全に重ね合わせていたから、そうした本質を、ソクラテスの正味の核から純粹に区分することなど、果たして、二千年も後のわれわれに可能と考えられてよいのだろうか、と、当然に問われてしかるべきだからである。

ソクラテスを主人公にしたプラトンの対話篇は、疑いもなく、何かれらの歴史的所与に基づいて創作された文学作品であった。すなわちそれは、実在のソクラテスが、問いと答えを繰り返す形の問答様式に則って世の人びとを教えた、という事実に基づいていた。ソクラテス自身は、こうした問答こそ、哲学的思索を押し進める本来の様式であり、他者との意思疎通を十分に図りうる唯一の方法なのだ、と信じて疑わなかった。しかもこの「他者との意思疎通を十分に図る」という後者は、かれが、実践的な目標に強く掲げるところでもあった。プラトンは、生まれついで劇作家であったから、ソクラテスに出会うまで、数々の悲劇作品の執筆にせっせと勤しんでいた。しかるに、師のソクラテスに出会って強い感銘を受け、ついには、真理を探究する哲学の道に大きく方向を転じた時、かれは、これらの作品をことごとく焼き捨てた、と伝承は教えている。プラトンはしかし、ソクラテスの死に接して、この師の姿をありし日のままに、生き生きとした形で保存しようとして深く心に決めた時、ソクラテスが展開した問答そのものを芸術的に模倣することこそ、自らに課

された仕事にはかならないと考え、それゆえ、自分自身の劇作家としての天賦の才を、ひたすら哲学の道に奉仕させたのだった。もつとも、ソクラテスという人物にその起源を仰ぐのは、単に「問答」という様式のみではない。プラトンの作品に登場するソクラテスが繰り返される問答では、特徴をもったパロディカルな命題が決まって繰り返され、そうした繰り返しはしかも、クセノフォンが報告する中身ともピタリと一致していたから、われわれは、ここからこう確信できるにちがいない。プラトンの対話篇は、その様式に加えて内容の点でも、ソクラテスの思索本体を曲りなりに基本母体としていたのだな、と。問題はしかし、実在のソクラテスに属する事柄が、プラトンの作品に描かれた事柄と、果たしてどれほどの隔たりを示しているかの点にある。クセノフォンが報告する中身は、プラトンのそれと重なり合う点もごくわずかで、しかも、クセノフォンはあまりに少なく語り、プラトンは他方、あまりに多く語っているという実感も禁じ得ないから、われわれとしては、これに縋るわけにもいかなない。手痛い「見殺し」を味わうだろうからである。すでにアリストテレスは、こう判断していた。プラトンの手で描かれたソクラテスが哲学している中身のほとんどは、ソクラテス自身の教えというよりは、むしろプラトンの教えに近いのだ、と。この点について、かれ自身は、いくつかの根拠を挙げて検証しているのだが、そうした検証の価値如何はそのうち吟味するとして、ともあれアリストテレスは、プラトンの対話篇を解釈して、これこそは新しいジャンルの芸術であり、まさしく韻文と散文の中間体なのだ、と口外した^⑩。ここにみる発言は、何よりもまず、散文で綴られた知的な戯曲^⑪といった文学様式を、おそらくは引き合いに出しているのだろうけれども、われわれがもし、プラトンはかなり自由に歴史的ソクラテスを論述した、というアリストテレスの見解に従うなら、こう仮定する必要があるのではないだろうか。すなわちアリ

ストテレス当人は、プラトンの対話篇を、様式と同じく内容の点でも、まさしく韻文と散文の混合体であると考えていたのだ、と。プラトンの作品は、いうところの「詩と真実（フィクションとノンフィクション）」のこの上ないミックスとみられていたわけである。

ソクラテスを主人公としたクセノフォンの対話篇と、その他のソクラテスの弟子たちのそれは、歴史的資料として用いる際には、当然ながら同じ疑義を孕んでいた。たとえば、クセノフォンの作品を眺めてみよう。かれの『弁明』は、真作か否かの点で大いに異論があるとはいえ、最近では、改めて真作と繰り返し認められている。とはいえこれは、自らを正当化する傾向があまりに強すぎて、ために、そもそも初めからマユツバ（眉唾）の烙印を押されていた。¹³これに対して『ソクラテスの思い出』は、長きにわたり、偽りのない歴史的事実を映したものと評価されてきた。こうした点は、かれの作品を用いるにあたり、絶えずわれわれを逡巡させてきた当の迷いから、一瞬にして、われわれを解き放つてくれるにちがいない。けれども、新しい研究成果は、こうした資料もやはり、たつぷりと主観的要素に染め上げられている事実を明示したのだ。¹⁴すなわち——クセノフォンは、若き日のソクラテスをよく知っていて、深い尊敬を捧げていたのだが、当人はしかし、ソクラテスの弟子たちが集うサークルに一度たりとも属したことはなかった。やがてかれは、ソクラテスの元を去って、背信の徒として有名なベルシアの王子キュロスが、実の兄弟のアルタクセルクセスに向けて企てた出征に、冒険的兵士として参加した。以来、一度とソクラテスにまみえる機会はなかった。そして十数年ののち、かれの手で、ソクラテスを主人公にした作品がまとめられたのである。けれども、その中のいわゆる「弁明文」のみは、どうやら、もっと早く出来上がっていたように思われる。¹⁵ここにいう弁明文は、明らかに単なるフィクションとして文学的に創作された「告発

文」を相手に、当事者であるソクラテスが展開した弁明をまとめたもので、われわれとしては、ここでの告発文の中に、ポリュクラテスという名のソフィストが、前四世紀の九〇年代に出版した小冊子の中身を識別できるだろう。弁明文そのものにすばやい反応を示したのは、わけても、リュシアスとイソクラテスの二人であった。われわれはしかし、クセノフォンもやはり、当時、同じく弁明文に強く反応していたのを、かれの『思い出』から十分に見抜くことができるのである。¹⁶クセノフォンの弁明文こそは、明らかに、ソクラテスの弟子たちのサークル内ですでに半分ばかり忘れ去られていた人物（ルクセノフォン）が、栄えあるソクラテス文学にはじめて入会を許された記念すべき文書であった。もともかれは、その後、ふたたび長い沈黙に入ったけれども、ともあれ、かれの弁明文は、本人自身の手で、のちに『思い出』の冒頭部分に挿入されることになった。¹⁷挿入はされても、この文はしかし、構成上のまとまりと完成度の点で、さらには、迫力に溢れた動機の点で、あくまでも一つの全体をなしていて、われわれが目にする『思い出』の他の部分から明らかに切り離されるにちがいない。

ところで、こうした弁明文の意図するところは、『思い出』の全体もそうであるように、一応はこう是認されている。すなわち、ソクラテスという人物が、神々に犠牲を捧げ、預言者たちを尋問し、友人には喜んで救いの手を差し伸べ、公的生活では常にその義務を果たすなど、まさしく愛国心の点でも、信心深さの点でも、正しさの点でも、並み居るアテナイ市民たちを各段に凌駕していたのだ、と大いに証明づけることにあった、と。だが、ここでのクセノフォンの叙述には、当然ながら、次のような異議が申し立てられるにちがいない。ソクラテスという人物が、それほど「まっとうな人間」であったなら、どうして、同胞市民の嫌疑をこれほどまでに掻き立てたのか、まるで説明はつかないし、まして

や、国家の危険人物として死まで宣告されるなど、およそ考えがたいではないか、とである。クセノフォンに向けた世の評価は、ここ最近、悪化の一途をたどっている。というのも、クセノフォン当人は、自らが報告する出来事の数々を直接に体験せず、これとの時間差は覆うべくもなかったし、さらには、哲学的な天分も乏しかったから、おのずと、用いる資料の面で既存の作品に助けを仰ぐほかはなかった、そして、実際に助けを仰がれた資料として、わけても、アンティステネスの作品が挙げられるだろう、と研究の上で証拠立てられたからである。このことは、われわれの手元から基本的に失われたソクラテスの弟子たちやプラトンの論敵たちの作品を再構成する上で、大いに興味を掻き立てるかもしれない。けれども、あえて注意を促したいのは、これが他方で、クセノフオンの描くソクラテスを、アンティステネスの道徳哲学を映す単なる透かし絵にすぎない、と解させる危険性を孕んでいる点である。こうした危険性の指摘は、なるほど、驚くばかりに誇張されているけれども、ここに紹介した研究を介して、何はともあれ、大きく注意を喚起された事柄があった。他でもない、クセノフォンは、およそ哲学に素人であったにもかかわらず、否むしろ、まさしく素人であったからこそ、多くの特徴に関して、ソクラテスの見解に素直に従いつつ、これをしかし、プラトンにみられたのと同様、自分固有の意味にしかるべく「解釈づけた」のだ、という点である。^⑧

ならば、われわれが手にする資料のこうした性質に関わって、われわれ自身に課された必至のディレンマを回避するなど、果たして可能なのだろうか。ここにいう歴史的問題のいかに厄介であるかを、才気に溢れた仕方で見事に定式化した最初の人物が、世に名高いシュライエルマツハーであった。かれもやはり、われわれが、もっぱらにクセノフォンを頼るのも、はたまた、もっぱらにプラトンを頼るのも、共にできない相

談であつて、つまるところ、そうした二人の当事者の間で、ある程度は、如才のない外交的役割を演じないわけにはいかない点をはつきりと確信していた。ゆえにシュライエルマツハーは、こう問いかけたのである。「ソクラテスという人物が、クセノフォンの報告通りの中身を具えていて、しかも、報告の中で、ソクラテスに固有の事柄」として明らかに数え上げられた性格的特性や生活原理が、まぎれもない歴史的事実であると仮定するなら、当のソクラテスは、実のところ何者であることができただか、そしてまた、プラトンは、自らの対話篇に描かれたような姿をソクラテスに纏わせただけれども、このことが、まっとうと根拠づけられるには、ソクラテス自身、実のところ何者でなくてはならなかったか」と。こうした発言には、なるほど、歴史家にはこの上なく有り難い、問題を一挙に解決する、開けゴマの呪文など、ただの一つも含まれていない。ここで求められているのは、ひとえに、われわれの批評的タクトがどの範囲まで振るわれてしかるべきかを、なるだけ厳密に定めることなのである。このため、われわれがもし、手にされた二つの資料の各々にどの程度まで従えばよいか、を正確に教えてくれる何らかの外的な基準を欠いたなら、当の発言は、疑いもなくわれわれを途方に暮れさせ、ついには、単なる主観的印象の類いに身を委ねさせかねないだろう。けれども、ここにいう外的な基準は、幸いなことに、ずっと以前からアリストテレスの報告の中に見いだされていた。アリストテレス当人は、この問題をひたすら客観的に研究する学者と思われていたからである。というのしかれば、ソクラテスとはいかなる人物であり、そもそも何を欲していたのかの問いに、もはや、ソクラテスの直接の弟子たちに幅広く認められた情熱的な関心も、さらには個人的な関心も抱くことはなく、しかも、当のソクラテスについて、今日のわれわれが入手できる以上の情報を入手するに十分な歴史的位置に、あくまでも時間的に身を置いて

いたのであるから。^③

さて、ソクラテスを相手に選んでアリストテレスが試みた歴史的検証は、これ自体が、いわゆるプラトンのイデア論と、さらには、このイデア論がソクラテス当人とどう関係しているかとも全体として深く結びついているだけに、価値の方もいっそう大きいのだが、そこで問われているのは、他でもない、プラトンの創設したアカデメイアでも頻繁に議論された中心問題であった。これに加えてさらに、当のイデア論がどこから生まれたかの問題も、アリストテレスがプラトンの学園で過ごした二十年の間に、やはり、繰り返し話し合われたにちがいない。プラトンの対話篇に登場するソクラテスは、哲学者として堂々とイデア論を提起し、この論はしかも、弟子たちのサークル内では周知の事柄としてあからさまに仮定されていた。この点に関して、プラトンの手で叙述されたソクラテスはしかし、どの程度まで歴史的事実に即していたのだろうか。われわれがもし、ソクラテスに固有の要素群からプラトンの哲学を導き出したそもそもの精神的過程を何とか再構築しようと試みるなら、これ自体は、決定的な重要項目となるにちがいない。アリストテレスは、プラトン自身がイデア論で実践したのとは反対に、普遍的概念を、感覚的な個々の現象世界から切り離された、それ自体として客観的な存在であるとはいささかも書き添えず、こうした点をめぐるプラトンとソクラテスの関係について、三つの重要な申し立てを行なっていた。

「その一」——プラトンは、学生生活の最初期に、ヘラクレイトス派に属するクラテュロスの講義に耳を傾けたのだが、そこでは、自然界の万物はとめどなく流転し、不動の永続性をしっかり保持しているものなど一つとして見当たらない、と教えられていた。その後プラトンは、ソクラテスと交流する機会に恵まれ、かれの前に、まったく別の世界が開示されることになった。ソクラテス当人は、そもそもの関心をひたすら

倫理的な問題に限定し、「正しき」とか「善き」とか「美しき」等々の普遍的性質を何とか概念的に究明しようと腐心していた。万物はとめどなく流転する」というクラテュロスの観念と、不動の真理がこの世にある」というソクラテスの前提は、一見したところ互いに排斥し合っており、とうてい調整など不可能なように思われた。プラトンはしかも、クラテュロスを介して、万物は流転する」という説にわけても了解を示していたから、たとえソクラテスが、われわれ人間の感覚世界における不動点を求めて辛抱強い探求を繰り返し、そうした探求を介して、当のプラトンの上に深い感銘を刻み込んでいたにしても、だからといって、この説自体が捨てられるところまでは行かなかった。こうしてプラトンは、次のような最終結論に至ったのである。すなわち、クラテュロスの方も、さらにはソクラテスの方も、共に正しかったのだ、というのも双方は、まるで異なった二つの世界を相手に論じ合っていたのであるから、と。万物は流転する」というクラテュロスの命題は、当のクラテュロスに知られていた唯一つのリアリティである、世にいう感覚的現象の数々をその相手としていた。プラトンもまた、こうした流転論は、われわれの感覚世界になら適用されても一向に構わないと主張して、この立場を後々まで変えなかった。これに対してソクラテスは、「善い」「美しい」「正しい」といった述語の数々の概念的性質——道徳的存在としてのわれわれの生存もつまりはこれの上に成立する——を求めて繰り返された問いを介して、あくまでも別種のリアリティに狙いを絞っていた。すなわち、絶えざる流転を繰り返すのではなく、本当の意味で「実在する」ところの、換言するならば、常に変わることなく同一のあり方を保つているところのリアリティに、である。

「その二」——プラトンは、ソクラテスから学び取られたこれらの普遍的概念の中に、今や、とめどない流転の世界から切り離された、本当

の意味での実在を見たのだった。かれは、ここにいう実体に「アイデア」という名を与えた。それは、われわれの知的な思索を介してしか捉えられず、いうところの真実在の世界は、これを素材にあまねく組み立てられていた。このようにみると、プラトンは、ともあれソクラテスを越えたといえるだろうか。ソクラテス自身は、そもそもアイデアを語ることもなく、さらには、アイデアと感覚的事物の分離を企てもしなかったからである。

「その三」——ソクラテスという人物に属すると考えるのが正当で、しかも、この人物に属すると認めないわけにはいかない事柄とは何だろうか。それは、アリストテレスに従うなら、まさしく次の二つであった。すなわち、普遍的概念の定義活動と、その際に用いられるべき帰納法の考案である。²¹⁾

ここに紹介されたアリストテレスの叙述が正しいとするなら、これを介して、プラトンの対話篇に描かれたソクラテスの姿における、實在のソクラテスに属する部分と著者のプラトンに属する部分がきっぱりと区分されるのではないだろうか。シュライエルマツハーの方法様式は、この場合、単なる理想の要求に留まる必要はなく、あくまでも具体的な実現に向かわれてよいだろう。近世紀の研究が、まぎれもなくプラトンの最初期の作品であると評している諸々の対話篇において、ソクラテスの吟味活動はいずれでも、「勇氣とは何か」「敬虔とは何か」「節制とは何か」という風に、あまねく普遍的なものを問うという形で展開されていた。クセノフォンですら、ほんのついでにせよ、語気を強めてこう力説していたのである。ソクラテスは、この種の吟味活動をくり返す中で、つまりは概念の定義に勤しんでいたのだ、と。²²⁾このようにして、プラトンなのか、はたまたクセノフォンなのか、という、われわれのディレクマから抜け出る道がようやくよくに開示された。というのも、ソクラテス

はここでは、概念哲学の創始者として登場していたからである。エデュアルド・ツェラーは、シュライエルマツハーの探求の行程を完成させるべく、自らの『ギリシア人の哲学』において、そもそもソクラテスをこのように描き出している。²³⁾ソクラテスが説いた教えは、ここでの解釈に従うなら、プラトン哲学への「やや穏当な前段階」に他ならず、これ自体は、プラトンの形而上学的な大胆さをひたすら避けようと努めながら、いうところの「自然」から目を転じて、道徳そのものの領域に自らを限定する中で、あくまでも実践を志向する新しいタイプの生き方の知恵を何とか理論的に根拠づけようと、あらん限りの汗を流したのだ。

こうしたソクラテス評価は、アリストテレスという絶大な権威に守られつつ、さらには、当の評価を導き出した確固たる方法的基盤に支えられて、長きにわたり、まるで文句のない決定的な最終評価とみなされてきた。けれども、ここにもみるソクラテスはいささか中途半端な人物で、主張されている概念哲学も何か瑣末事に近い、という印象を拭えなかったから、この評価は、その後も引き続いてわれわれを満足させるには至らなかった。ニーチェの手で容赦のない攻撃が加えられたのも、実に、このような教師ぶった概念人間としてのソクラテスであった。こうした攻撃は、それゆえ、世界を転換させた偉大な人物という、われわれの「内なるソクラテス信仰」にいささかの打撃も与えなかったけれども、ただ、これを介して大きく打撃を被ったものもあった。他でもない、歴史的な証人としてのアリストテレスに対するわれわれの信頼である。アリストテレス自身は、きわめて激しく論戦を挑んだプラトンのアイデア論がそもそも何に由来したかの問題に、果たしてそれほど関心を示さなかったのだろうか。かれは、歴史的な事実を解釈するにあたり、それ以前にも間違いを犯していたのではなかったか。かれは、わけても哲学史的な

総覧作業において、自分自身の哲学的立場にあまりに強く縛られすぎていたのではなかったか。アリストテレス当人が、プラトンに對抗してさらに先のソクラテスにまで遡り、この人物をプラトン以上に冷静に、それゆえいつそうアリストテレス的に思い浮かべた、という点は十分に理解されるにしても、かれはしかし、当のソクラテスという人物について、果たして、プラトンの対話篇から得られると確信した以上の事柄を本当に知っていたのだろうか。およそこうした疑念に促されて、今日のソクラテス研究は開始された²⁴。これと共に、しかしながら他方、以前には手元に保持されていると信じ込まれていた、確固たる基盤も、空しく見捨てられるはかばかかった。ともあれ、これまでに登場したソクラテスの肖像が、それぞれに、まるで正反対の姿を競い合っている奇妙な事態に目を向けるなら、われわれが、右に紹介した諸々の仮定に触れて実感する不確かな状況も、この上なくありありと彷彿されるにちがいない。ここにいう「不確かな状況」は、たとえば、歴史的ソクラテスに向けて今ある閉塞状況を突破しようとする、わけでも印象深く、学問的にもとりわけ自己完結した二つの今日的な試みを介して、はっきりと特徴づけられるのではないだろうか。すなわち、ソクラテスをめぐってベルリンの哲学者ハインリッヒ・マイヤーのまとめ上げた偉大な作品と、聖アンドリュースのスコットランド学派——文献学者のJ・バーネットと哲学者のA・E・テイラーに代表される——の手で成し遂げられた業績、がそれである²⁵。

双方の見解は、共に、アリストテレスを歴史的証人の座から除き去るという点から出発していた。双方にとつて、ソクラテスこそ、かつて実在した最も偉大な人間の一人にはかならない。双方の争いは、このソクラテスが果たして「哲学者」であったのか否か、の問題に先鋭化されてよいだろう。双方は、もしもソクラテスが、以前のイメージに違わず、

プラトン哲学の「正門入口」と形容されるだけの単なる副次的人物にすぎないのであれば、とうてい「哲学者」の名に値しないという点では互いに意見を同じくしていた。双方はしかし、到達した帰結において完全に袂を分かつたのである。すなわち、一方の陣営のハインリッヒ・マイヤーに従うなら、ソクラテスが具える比較を絶した偉大さは、おしなべて、「ソクラテス」理論的思索家」といった尺度で十分に測り尽くすことはできない。ソクラテスこそは、人間における道德的な自己解放の長くて骨の折れる道行きを頂点に位置すると考えられてよい、他の何ものによつても凌駕されない人間の姿勢の創始者であった。かれは、道德的人格に具わる自己統御と自己抑制の福音を堂々と告知したのだった。ソクラテスはそのから、いうならばイエス・キリストの、あるいは東洋における救済宗教の「西洋版の鏡像」として登場し、ここに、双方の原理的争いが開始されたのである。しかるに、哲学的なイデア論、論理学、諸々の概念はすべて、プラトンの手ではじめてこの世に誕生した。プラトン自身は、完全に固有の人物であつて、ソクラテスの特質とはまるで異なつた才能に導かれつつ、諸々の理論を次々に樹ち立てる優れた思索家であった。かれは、芸術家に特有の自由にわが身を委ねて、対話篇では、樹ち立てられた理論をソクラテスの上に遠慮なく転送した。もつとも初期の作品のみは、歴史的ソクラテスの姿をなすだけ忠実に留めていたけれども²⁶。

これに対して、スコットランド学派に属する他方の陣営の学者たちもやはり、プラトンを、師であるソクラテスと真に気脈の通じ合った、それゆえ、師を叙述するに足る唯一の人間であると評価していた。かれらはしかも、ソクラテスを主人公としたプラトンの対話篇のすべてが、師の忠実な叙述であると判定したのだった。これに比べるとクセノフォンは、かれらの評価では、ソクラテスの本当の意味を何ら理解できない「俗

物の権化にすぎなかった。かれはしかし、自らの限界を正しく査定していたからこそ、基本的に、他の人たちが試みたソクラテスへの記述の補足にひたすら努めたのであった。そうしたかれが、必要に迫られて、真の意味での哲学問題に言及せざるを得なくなると、どうした振る舞いに及んだか。クセノフォンは、ごく短い示唆に訴えつつ、ソクラテスという人物は、ここで自分が叙述している中身よりさらに多くを具えた人間なのだ、とのみ読者自身に仄めかして、それで満足したのだった。およそこのような見解に従うなら、プラトンが、実際に存在した通りのソクラテスを忠実に描こうとしないで、歴史的ソクラテスにはまるで縁のなかつたプラトン固有のイデア論を、あえてソクラテスの創作であると言ひ張つた、などと信じ込むのは、主流を占める解釈の最大級の失策にちがいない。多くの読者を迷わせるこうした所業は、プラトン自身の完全に与り知らないところであつた。この場合に、ある人びとは、初期のプラトンと後期のプラトンを人為的に区分した上で、初期のプラトンのみが、ソクラテスの忠実な肖像化を意図して、晩年のプラトンは、ようやく徐々に形を整えつつあつた自分固有の哲学を、その口を借りて語らせる、単なる仮面としてソクラテスを用いたにすぎない、と想定したけれども、これなどはしかし、スコットランド学派に従うなら、内的に考えて、ありそうもないと言わざるを得ない。さらに加えて、プラトンの初期対話篇は、構成の上でいっそう整理された後期の作品——たとえば『パイドン』と『国家』——に登場する教え自体を明らかに前提していたのである。実のところプラトンは、もはやソクラテスの教えでなく自分固有の思想を提起しようと思ひ立つたそもその時点から、当のソクラテスを、問答における主人公の座から一貫して引きずり下ろし、これに代わって、見知らない——あるいは匿名の——人物を登場させてもいた。ソクラテス自身は、あくまでもプラトンが主張する通りの

人物であつた。すなわち、イデア論、魂の先在と想起論、魂の不死論、理想国家論などの紛れもない創造者であつた。かれは、一言で語るなら、西洋における形而上学の「偉大な父」であつたのである。^⑧

およそこのようにして、二つの対極的な解釈は成立する。これに拠ると、ソクラテス当人は、まるで哲学的思想家から程遠い、ひたすら道徳的な覚醒を促す英雄として登場するか、あるいは、プラトンの手でその「化身」と描かれたように、まさしく思索哲学の創始者に該当するか、のいずれかとなるだろう。要するに、ソクラテスの提起した運動をすでに当人の死後まもなく分裂に導いて、相互に反目し合う学派を誕生させた「古い動機」が再び目を覚まして、二つの学派の各々に、自らに固有なソクラテスの肖像を改めて描かせた、ということなのである。一方には、アンティステネスの理想があつて、かれ自身は、知ること自体が不可能であると訴え、自らの本質とするところは、いわゆる「ソクラテスの強さ」に、すなわち、揺るぎのない不動の道徳的意志にあると考へた。他方には、プラトンの教えがあつて、ここでは、ソクラテスの無知の告白が、われわれの魂自体に内在する、いっそう深くて揺るぎのない「価値の知」を発見する過程で通過すべき単なる門にすぎない、と考へられていた。これらは、双方ともに、自らの掲げるソクラテス像こそ真の——あるいは、最終的にはそう考へざるを得ない——ソクラテスなのだ、と繰り返して主張した。まさしく、対極に位置する」と形容されてよい、こうした解釈上の基本的対立がソクラテスの死後に顕わとなり、しかもこれが、われわれの現代に再び登場したのは、果たして単なる偶然にすぎないのだろうか。むろん、そう考へることはできない。ここにもみる対立の再登場（ないし繰り返し）は、われわれの依拠すべき資料が、ここに示された両方向に分かれているのだから、と語つたところで、やはり、うまく説明づけるのはむづかしい。それよりはむしろ、ソクラテスに固

有の人格にまぎれもない二義性が具わっていて、そうした二義性が、二つの方向での解釈を許したと考えられてしかるべきかもしれない。このように解釈するならば、双方の見解は、共に、ある意味では事実即し、それゆえ歴史的に正当と評価されてよいけれども、そこにはしかし、拭きたい偏りもはつきりと看取されるから、ここでの偏りを何とか克服しようとする積極的試みが、当然に導き出されてくるにちがいない。けれども、所与の出来事を解釈する際には、個々の問題を捉える観察者固有の立場がくり返し常に介入してこざるを得ず、これ自体は、原則的な歴史的立場についても例外ではない。双方の解釈を代表する学者たちは、明らかに、自分には「決定的に重要な」問題について、ソクラテスが、なおも未決定の状態を保ち続けるのにとうてい納得などできなかった。歴史家はだから、こう結論したのである。ソクラテスは、すでに当時——あるいは、その後まもなく——分離を迫られた対立を、なおいまだ自らの内で分離させずにいたのだ、と。このことは、われわれの目からみたソクラテスをいっそう複雑化し、いっそう興味深くしたのだが、同時にまた、いっそう理解しづらくもしたのだった。ソクラテスの偉大さは、かれと時代を共にした人たちの内、とりわけ精神的に優れた第一級の人物によって間違いなく察知されていたけれども、その偉大さはしかし、先に挙げた「なおいまだ……せずにいる」という当人固有の状態と深く関わっていたのではなかったか。すなわち、ソクラテスの時代にはすでに解体の最中であつた調和が、なおいまだ、当人の内で受肉化を保っていたのではなかったか。ソクラテス自身は、古き良き時代の生活様式と、いまだ未知の「きたるべき領域」の国境線上に佇んでいたように思われる。そしてかれは、きたるべき領域に向けた歩みを他の誰にも増して深く刻んだのだけれども、この歩み込みはしかし、あくまでも慎まれてしかるべきであつたかもしれない。

ソクラテス(その一)

注

- ① ソクラテスが与えた影響の足跡を綴ろうとすれば、とてつもない企てになるだろう。そうした企てはしかし、まずは時代を区切った上で個々別々に取り組まれるなら、成果の方も、かなり容易に約束されるにちがいない。ベンノ・ベームの手でまとめられた「十八世紀におけるソクラテス」(『近代における個の自覚が歩んだ発展史の研究』ライプツヒ、一九二九年に所収)は、この種の具体例にほかならない。
- ② ソクラテスへの憎しみは、ニーチェの処女作である『音楽の精神からの悲劇の誕生』の内に、すでにその顔を覗かせていた。この著者にとつて、ソクラテスという人物は、あまねく「理性と学問」の象徴そのものであつたからである。H・J・メッテの手で新たに公刊された『悲劇の誕生』の印刷原稿のオリジナル(ミュンヘン、一九三三年)には、いまだワグナーと近代オペラに関する箇所が盛り込まれておらず、そのタイトルも「ソクラテスとギリシア悲劇」とされている。ここからわれわれは、この作品でニーチェが問題としたのは、あくまでも、ソクラテスの営為にみられる合理的の精神とギリシア人に特有の悲劇的な世界解釈の間で、しかるべき内的決着を図ることだったのだな、と密かに読み取ることができるかもしれない。こうした極端きわまる問題提起はしかし、ギリシア精神と生涯にわたる格闘をくり広げたニーチェ自身のたぎる情熱を頭に置かないなら、とうてい理解など困難にちがいない。ともあれ今は、E・シユプランガー「ソクラテスをテーマに掲げたニーチェ」(テオフィル・ボレアスの四〇年祭、ピルソワ、アテナイ、一九三九年)を参照のこと。
- ③ ソクラテス以前のギリシアの思想家たちを驚くほど高く評価するこうした新しい立場は、ニーチェの若い時代の論文「ギリシアにおける悲劇時代の哲学」の内に、あらかじめ仄めかされていた。ところで、ここにみる高い評価を準備したのは、ヘーゲルとショーペンハウアーの哲学であつて、世に見られているように、ツェラー自身が『ギリシア人の哲学』の第一巻にまとめた、ソクラテス以前の哲学者たちをめぐる歴史的かつ学問的な叙述ではなかった。ヘーゲルの「矛盾」論は、まさしくヘラクレイトスを継承していたし、ショーペンハウアーの「自然の内なる意

志々論も、ソクラテス以前の哲学者たちに共通した思索様式との類似性を示していたからである。

④ アリストファネスの喜劇は、まさに「ソフィストである」という理由でソクラテスを批判したけれども、そうした批判にニーチェ本人が積極的に与したのは、あくまでもこれに基づいていた。

⑤ いわゆるソクラテス対話篇が文学様式として世に登場した年代を、はるかに早めて、ソクラテスの生前に設定する近代の学者たちの中で、ここでは、コンスタンティン・リッター（『プラトン』ミュンヘン、一九一〇年、第一巻、二〇二頁）とヴィラモヴィッツ（『プラトン』ベルリン、一九一九年、第一巻、一五〇頁）の名のみを挙げておきたい。プラトンの初期対話篇をこれほど早い時期に位置づける立場は、これらの対話篇の本質とその哲学的内実に関して、二人の学者に保持されていた見解自体と深く結びついていた。

⑥ この見解は、リッターに比べて、ハインリッヒ・マイヤー（『ソクラテス』チュービンゲン、一九一三年、一〇六頁以下）の手でいつそう詳しく根拠づけられている。A・E・テイラー（『ソクラテス』エディンバラ、一九三二年、一一頁）もむろん、これに同調していた。

⑦ プラトン『ソクラテスの弁明』三九C。

⑧ H・マイヤー（『ソクラテス』一〇六頁）は、正当にもこう仄めかしていた。

⑨ イボ・ブラン『ギリシア人の文学的肖像』ベルリン、一八九六年、二一三頁以下と、ルドルフ・ヒルツェル『対話（第一巻）』ライプツィヒ、一八九五年、八六頁を参照のこと。

⑩ ソクラテスの問答の前史については、R・ヒルツェル『対話（第一巻）』二頁以下を、当の問答の様式とこれの文学的な代行者については、六八頁以下を参照のこと。

⑪ デイオゲネス・ラエルティオス、Ⅲ巻三七（ローゼ、アリストテレス断片七三）のアリストテレスの項。

⑫ ヘレニズム期の哲学者たちは、こうした見解をすでに抱いていて、キケロ『国家論』Ⅰ巻一〇、一六は、かれらに従っていた。

⑬ K・v・フリッツ（『ライオン博物館八〇』一九三二年、三六頁以下）は、

クセノフォンの『弁明』が偽作であるという新たな、それも、私の目には、決定的なと映る証拠を挙げている。

⑭ H・マイヤー『ソクラテス』二〇〇七七頁。

⑮ われわれは、こうした名前の下に、H・マイヤー（『ソクラテス』二二頁以下）やその他の学者たちに倣って、クセノフォン『ソクラテスの思い出』の最初の二つの章を思い浮かべるだろう。

⑯ クセノフォン（『ソクラテスの思い出』Ⅰ巻一―二）は、ここでの「告訴人」を、常に単数形（「ホ・カテーゴロス」）でのみ語っていたのに対して、プラトン（『ソクラテスの弁明』）の方は、あくまでも複数形で語っていた。この方が、実際の裁判の進行状況に相応しいからである。クセノフォンは、なるほど最初の時点では、裁判上の告訴内容も取り上げているけれども、それ以後は主として、ソクラテスに向けられた世の非難と対決していた。この非難はしかし、他の資料からも学ばれるように、もつと後の時点でもまとめられ、ポリュクラテスの小冊子に載せられたものであった。

⑰ H・マイヤー（『ソクラテス』二二頁以下）の説得力に溢れた説明を参照のこと。かれは、クセノフォンの『弁明』が「弁明文」と深く関係していた点にも同意していた。クセノフォンの『ヘレニカ』の冒頭（一―一二）は、本人が、元々は独立文と考えられたものを、のちに、より大きな別の全体に加え入れた一例にほかならない。この部分は、元々は、トゥキユデイダスの作品を完結させる目的を担っていたから、必然的に、ペロポネソス戦争の終結でその幕を下ろしていた。後になってクセノフォンは、自らがまとめたギリシア史の記述（前四〇四―前三六二年）を、この文に繋げたのであった。

⑱ F・デュムラー（『アンティステニカ』と『アカデミカ』）という先例に続いて、とりわけカール・ヨエルが、全三巻に及ぶ学術作品『クセノフォンが描く真正のソクラテス』（一八九三―一九〇一年）を介して、クセノフォンのソクラテス記述がどれほどアンティステネスに依存しているか、を追求した。成果としての結論は、あまりに仮説が多すぎて、全体として納得しがたいものがある。H・マイヤー（『ソクラテス』六二―六八頁）は、それゆえ、ヨエルの研究における堅牢な部分を勇み足の部

分から何とか分離しようと腐心した。

- ⑱ フリードリッヒ・シュライエルマツハー『哲学者としてのソクラテスの価値について』一八一五年（全集、Ⅲ巻二）、二九七～二九八頁。
- ⑳ これこそは、ソクラテス問題を扱う際にエデュアルド・ツェラー（『ギリシア人の哲学』第二巻一五、一〇七頁と一二六頁）が採った批判的立場であった。
- ㉑ アリストテレス『形而上学』A巻六、九八七a三二―b…M巻四、一〇七八b一七―三二…M巻九、一〇八六b二―七…同『動物部分論』I巻一、六四二a二八における部分的には重なり合い、部分的には補足し合う報告を参照のこと。A・E・テイラーは、アリストテレスの手で強調されたプラトンとソクラテスの差異を何とか弱めようとひたすら腐心した。これはしかし、彼自身が抱く両者の関係イメージに基づくなら、あくまでも当然であったにちがいない。なお、かれとは逆の立場もあり、これについては、W・D・ロス『アリストテレスの形而上学』（オックスフォード、一九二四年）I巻XXXIII以下における、アリストテレスの証言の意義をめぐる新たな検討と、この証言が価値ある点の立証を参照のこと。
- ㉒ クセノフォン『ソクラテスの思い出』IV巻六、一。
- ㉓ E・ツェラー『ギリシア人の哲学』第二巻一五、一〇七頁と一二六頁。K・ヨエル（『クセノフォンが描く真正のソクラテス』第一巻、二〇三頁）とTh・ゴンペルツ（『ギリシアの思想家たち』第二巻四、四二頁以下）もやはり、アリストテレスの証言に対する信を、基本的にはツェラーと共

有していた。

- ㉔ わけても、H・マイヤー（『ソクラテス』七七―一〇二頁）とA・E・テイラー（『各種のソクラテス像 (Varia Socratica)』オックスフォード、一九一一年、四〇頁）の批判を参照のこと。
- ㉕ 何度も引用したH・マイヤー『ソクラテス』と、これと真つ向から対立するA・E・テイラー『各種のソクラテス像』および『ソクラテス』（一九三二年）を参照のこと。テイラー自身は、バーネットの見解に賛同し、これをさらに発展させていた。J・バーネット『ギリシア哲学』（一九一四年）とその論文「ソクラテス」（ヘイスティングス編纂『宗教と倫理の百科全書』XI巻に所収）を参照のこと。C・リッター（『ソクラテス』（一九三二年））もまた、アリストテレスの証言の価値を否認する一人であった。
- ㉖ H・マイヤー（『ソクラテス』一〇四頁以下）は、実在のソクラテスを知る上での歴史的資料として、『弁明』と『クリトン』というプラトンの「個人的な」作品を、わけても高く評価した。これに続いてかれは、『ラケス』『カルミデス』『リュシス』『イオン』『エウチュプロン』さらには『ヒッピアス（大）（小）』といったプラトンの一定数の小対話篇をも、なるほど自由に創作されているが、本質的に信頼のおける叙述である、とやはり評価している。
- ㉗ 先の注㉕に引用されたテイラーとバーネットの作品を参照のこと。

（本学文学部教授）